

講義資料集

はじめに

【資料1】マルクスへの注目

○海外での注目

- ・英国営放送BBCのアンケート調査（1999年）——「過去1000年間で最も偉大な思想家はだれか」でマルクスが第1位に
- ・米紙「ワシントン・ポスト」の論説（2002年1月）——「この世界のどこかで、つぎのマルクスが歩いている」（デイビッド・ロスコフ元商務副次官）
- ・英紙「フィナンシャル・タイムズ」の論説（2002年8月）——「マルクスの洞察は、いまも光を放つことが可能である」（オイオール・ファーガスン・オックスフォード大教授）
- ・米週刊誌『USAニュース・アンド・ワールド・リポート』の特集「20世紀を形づくった三人の知性 天才の秘密」（2003年9月）——マルクスが三人の天才の一人に
- ・仏週刊誌『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』（2003年10月）——特別号「カール・マルクス」を発行
- ・英国営放送BBCのアンケート調査（2005年7月）——「もっとも偉大な哲学者」でマルクスが第一位に
- ・独週刊誌『シュピーゲル』（2005年8月22日号）——表紙に「一匹の妖怪が戻ってくる」という見出しとマルクスがVサインをしているイラストをかかげて特集。「資本主義には彼（マルクス）は欠かせない。恐慌が欠かせないように。なぜならこの『貨殖』の体制を解剖したのは他ならぬ彼だからである」

○日本国内でも

- ・リクルート社の無料情報誌『R25』が「800字でわかるか!? 秋の夜長に『資本論』を学ぶ」という記事を掲載し、「資本論の主人公はボクたちだったの?」と紹介（2004年10月）
- ・週刊経済誌『エコノミスト』（毎日新聞社）が「なぜか人気 マルクス」の特集記事。その中で、「マルクス関連本は大人気」として、不破議長の『「資本論」全三部を読む』を取り上げ、「この手の本で一万部を超えるのは異例」と紹介。（2005年4月）
- ・宮沢章夫『「資本論」も読む』（WAVE出版）。「せめて『資本論』を読んでから死にたい」と『資本論』に挑戦した劇作家が、みずからの悪戦苦闘ぶりを紹介。「『資本論』が問題にしているのが『経済』というカテゴリーよりももっと根源的な人間そのものだと見えてきた。ただごとにならない。これはただごとならぬテキストだと、走り出さんばかりに興奮したのだ」（同書、59ページ）

一、科学的社会主義とは

【資料 2】 そもそも社会主義とはなにか

「現代の社会主義は、その内容からいえば、まず、一方ではいまの社会にゆきわたっている、有産者と無産者、資本家と賃労働者の階級対立の直観から、他方では生産のなかにゆきわたっている無政府状態の直観から生まれた産物である。」（エンゲルス『空想から科学へ』1880年、古典選書シリーズ、新日本出版社、23ページ）

【資料 3】 空想的社会主義について

「資本主義的生産の未成熟な状態、未成熟な階級の状態には、未成熟な理論が照応していた。未発達な経済的関係のなかにまだかくされていた社会的課題の解決は、頭の中から作り出さなければならなかった。……必要なことは、社会制度の新しい、いっそう完全な体系を考案し、これを宣伝により、可能な場合には模範的実験の実例によって、外から社会におしつけることであった。これらの新しい社会体系は、はじめから空想になるように運命づけられていた。」（同前、32～33ページ）

「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤の上にすえられなければならなかった。」（同前、46ページ）

「従来の社会主義はたしかに現存の資本主義的生産様式とその結果を批判したが、しかしそれを説明することはできなかつたし、したがってそれを克服することもできなかつた。従来の社会主義はそれを簡単に悪いものとして投げ捨てることができただけである。」（同前、60ページ）

「すべての社会的変動と政治的変革の究極の原因は、人間の頭のなかに、すなわち、永遠の真理と正義についての人間の認識の発展に求めるべきでなくて、生産様式と交換様式の変化に求めるべきであり、それは哲学のなかでなくて、その時期の経済のなかに求めるべきである。……あばき出された弊害を取り除くための手段もまた、変化した生産関係そのもののなかに——多かれ少なかれ発展して——存在しているにちがいない……。この手段は、けっして頭のなかで考案すべきものではなくて、頭をつかって現在の生産の物質的事実のなかに発見すべきものである。」（同前、62ページ）

二、唯物論と弁証法

【表 1】唯物論か観念論か

唯物論	自然や物質を本源的なものとみなす立場。自然も社会も、客観的に実在するものだと考える。さらに、「自分」を含む人間は、そうした自然や社会の一部であると見なす。
観念論	人間の精神や意識を本源的なものと考える立場。「世界」は、人間の意識や精神によって成り立っており、人間の意識から独立した客観的存在などというものは実在しないと考える。

【資料 4】マルクスの研究のあゆみ

「私の専門研究は法学であったが、しかしそれを私は、哲学と歴史を研究するかたわらに副次的な学科として学んだにすぎなかった。1842年から1843年にかけて、『ライン新聞』の編集者として、私ははじめて、いわゆる物質的な利害関係に口をはさまざるをえなくなり困惑におちいった。木材盗伐および土地所有の分割にかんするライン州議会の討議、当時のライン州知事フォン・シャーパー氏がモーゼル農民の状態について『ライン新聞』を相手にして起こした公けの論争、最後に自由貿易と保護関税とにかんする討論、これらのことが私が経済問題にたずさわる最初のきっかけとなった。他方では、その当時は、「さらに前進しよう」という善良な意志が専門的知識よりもずっと重きをなしていた時代であって、フランスの社会主義および共産主義の淡い哲学色を帯びた反響が『ライン新聞』においても聞かれるようになっていた。私はこの未熟な思想にたいして反対を表明した。しかし同時に、『アルゲマイネ・アウグスブルク新聞』とのある論争において、私のそれまでの研究では、フランスのこれらの思想傾向の内容そのものについてなんらかの判断をくだす力のないことを、率直に認めた。そこで私は、『ライン新聞』の経営者たちが紙面の論調をやわらげれば同紙にくだされた死刑の宣告を取り消させることができるなどと幻想をいだいていたのをむしろ好機ととらえて、公けの舞台から書齋に退いたのである。

私を悩ました疑問の解決のために最初にとりかかった仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、その序説は、1844年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究が到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体から理解されるものではなく、またいわゆる人間精神の一般的発展から理解されるものでもなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、18世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、『市民社会』という名のもとに総括しているのであるが、しかもこの市民社会の解剖は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。経済学の研究を私はパリで始めたが、ギゾー氏の追放命令によりブリュッセルに移ったので、そこでさらに研究を続けた。」（マルクス「『経済学批判』への序言」1859年、古典選書シリーズ『「経済学

批判」への序言・序説』新日本出版社、12～14ページ)

【年表】マルクスの歩みから

- 1836年 ベルリン大学法学部に入学。ヘーゲルの哲学を研究し、「青年ヘーゲル派」の一員となる。
- 1842年 大学卒業後、ライン州の急進ブルジョアジーが創刊した「ライン新聞」の寄稿者に。10月からは編集長として、革命的民主主義の立場から反動的なプロイセン政府批判を展開。
- 1843年 3月、「ライン新聞」編集部を去り、パリに移住。
- 1844年 『独仏年誌』を創刊。マルクス「ユダヤ人問題によせて」「ヘーゲル法哲学批判序説」、エンゲルス「国民経済学批判大綱」を掲載。このなかで、観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義の立場に前進。
8月、エンゲルスがマルクスを訪問。2人の理論上の一致を確認し、共同が始まる。
- 1845年 共同して『聖家族』を刊行、「青年ヘーゲル派」のバウアーを批判。
エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』刊行。
「ドイツ・イデオロギー」の共同執筆を開始（～46年7月ごろ）。
- 1846年 ブリュッセルで共産主義通信委員会をつくる。
- 1847年 マルクス、エンゲルス、「正義者同盟」に加盟。6月、「正義者同盟」は「共産主義者同盟」と改称（第1回大会）。12月、第2回大会、綱領の起草をマルクス、エンゲルスに委嘱。
- 1848年 2月、『共産党宣言』刊行

○ヘーゲル（1770～1831年）

ドイツ古典哲学を代表する哲学者。1818年からベルリン大学の哲学教授になり、1829～30年には同大学総長。ヘーゲルの哲学体系は当時のプロイセン王国の「国定哲学」といわれるほどの地位を占めた。

ヘーゲルによれば、世界は「精神」のあらわれであり、精神そのものである。彼は、この精神を「絶対理念」と呼び、永遠の昔から世界のどこかに存在する「絶対理念」が自己展開してゆくと考えた。すなわち、「絶対理念」はまず、純粹な「存在」（ただあるということだけのこと）から出発して自己展開し、最後に「絶対理念」に到達する。そこでこんどは、みずからを外化して自然となり、自然のなかから生命が生まれ、人間があらわれ、人間の精神の発展において、ふたたび「絶対理念」に復帰する。このような「絶対理念」の自己展開が世界であり、ヘーゲルの哲学体系そのものにほかならなるとした。

○「青年ヘーゲル派」

ヘーゲルの死後、ヘーゲル学派のなかで、弁証法的方法を主要なものとし、宗教批

判を展開したグループ。「ヘーゲル左派」ともいう。宗教批判は実質的には当時の封建体制への批判を意味し、マルクス、エンゲルスも一時このグループに属した。その後、プロイセン王国の反動支配が強化されるなかで、フォイエルバッハ（『キリスト教の本質』1841年）のように唯物論の立場にすすむ人物も現われたが、多くは観念論的批判に終始したため、マルクス、エンゲルスは『聖家族』『ドイツ・イデオロギー』などで批判。

【資料5】観念論から唯物論へ

「われわれがそれからはじめる諸前提は、決して恣意的な諸前提でも教条でもなく、それは空想のなかだけで度外視することができる現実的な諸前提である。それは、現実的な諸個人、彼らの行動、および彼らの物質的な生活諸条件——眼前に見いだされた生活諸条件、ならびに、彼ら自身の行動によって産みだされた生活諸条件——である。したがって、これらの前提は、純粹に経験的な方法で確認できる。」（マルクス、エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」1845～46年、古典選書シリーズ『新版 ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、17ページ）

「天上から地上へ降りてくるドイツの哲学とはまったく反対に、ここでは地上から天上へと上昇がおこなわれる。すなわち、人間たちが語ったり、空想したり、おもいうかべたりすることから出発して、そこから肉体をそなえた人間たちにたどりつくのではなくて、現実活動している人間から出発して、彼らの現実的な生活過程から、この生活過程のイデオロギー的な反映と反響の発展もまたしめされるのである。」（同前、27ページ）

【資料6】哲学の根本問題

「すべての哲学の、とくに近代の哲学の、大きな根本問題は、思考と存在との関係にかんする問題である。……

……存在にたいする思考の、自然にたいする精神の関係という問題、すなわち哲学全体の最高の問題……。存在にたいする思考の地位に関する問題は、中世のスコラ学においてもやはり大きな役割を演じており、本源的なものはなんであるか、精神かそれとも自然かという問題、この問題は、教会との関係でいうと、神が世界を創造したのか、それとも世界は永遠の昔から存在しているのか、というふうには先鋭化された。

この問題に答える立場にしたがって、哲学者たちは2つの大きな陣営に分かれた。自然にたいして精神の本源性を主張し、したがって結局のところ、なんらかの仕方の世界創造をみとめた人びとは……観念論の陣営を形づくった。自然を本源的なものとみた他の人びとは、唯物論の種々の学派に属する。

観念論と唯物論という2つの言いあらわしは、本来、これ以外の意味をもっておらず、この本でもこれら二つは、これ以外の意味にはつかわれていない。これら2つにこれ以外の意味をもち込むと、どんな混乱が生じてくるかは、以下にみられるであろう。」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』1888年、古典選書シリーズ、新日本出版社、30～33ページ）

※本源的——どちらが“みなもと”、大もと、根源か、ということ。どちらが大事かではないことに注意。

【表 2】弁証法的なもの見方の特徴

	弁証法的な見方	形而上学的な見方
第 1	ものごとを世界の全般的な連関のなかでとらえる。	ものごとを、個々ばらばらにとらえる。
第 2	すべてを生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる。	固定した、いちど与えられたらそれきり変わらないものとしてとらえる。
第 3	固定的な境界や「不動の対立」にとらわれない。反対物への転化も視野にいれる。	ものごとを、「白は白、黒は黒」という絶対的な対立のなかでとらえる。

(不破哲三『科学的社会主義を学ぶ』新日本出版社、四六ページ)

【資料 7】弁証法的な見方と形而上学的な見方

「(イ) われわれが自然あるいは人間の歴史あるいはわれわれの精神活動を考察すると、まずわれわれの前にあらわれるのは、連関と相互作用が無限にからみ合った姿であり、この無限のからみ合いのなかでは、どんなものも、もとのままのもの、もとのままのところ、もとのままの状態にとどまっているものはなく、すべてのものは運動し、変化し、生成し、消滅している。したがってわれわれはまず全体の姿を見るのであって、そのなかでは個々の事物は多かれ少なかれ後方にしりぞいている。われわれは、運動し、移行し、連関しているものよりも、運動、移行、連関により多く注意をむける。この原始的な、素朴な、しかし事柄の本質上正しい世界観が、古代ギリシア哲学の世界観であり、最初にヘラクレイトスによってつぎのようにはっきりとのべられている。すなわち、万物は存在し、また存在しない。なぜなら、万物は流動しており、不断に変化し、不断に生成し消滅しているからである。

(ロ) しかしこの見解は、たとえ現象の全体の姿の全般的な性格を非常に正しくとらえているにしても、この全体の姿を構成している個々の事物を説明するには十分でない。そしてわれわれがこれらの個々の事物を知らないかぎり、全体の姿もわれわれにとってあきらかではないのである。これらの個々の事物を知るためには、われわれは、それらを自然的または歴史的連関からとりだし、それぞれ独立に、その性状、その特殊な原因と結果などにしたがって、それらを研究しなければならない。このことは、なによりもまず自然科学と歴史研究の任務である。これらの研究部門は、なによりもはじめにそのための材料を努力して集めなければならなかったというまことにもっともな理由によって、古典時代のギリシア人のあいだではただ従属的な地位しかしめていなかった。自然のおよび歴史的な材料がある程度まで集められたのちはじめて、批判的なふるいわけ、比較、あるいは綱、目、種への分類にとりかかることができた。だから、精密な自然研究はやっとアレクサンドリ

ア時代のギリシア人のあいだではじまったのであり、のちに、中世にアラブ人によってさらに発展させられたが、ほんとうの自然科学はようやく15世紀の後半にはじまるのであり、その時以来、それは加速度的に進歩してきた。自然をその個々の部分に分解すること、種々の自然過程と自然対象を一定の部類に分けること、生物体の内部をその多様な解剖学的形態にしたがって研究することは、最近400年間に自然を認識するうえでおこなわれた巨大な進歩の根本条件であった。

(ハ) しかし、それは同時に、自然物や自然過程を個々ばらばらにして、大きな全体的関連の外でとらえる習慣、したがって、それらを運動しているものとしてでなく、静止しているものとして、本質的に変化するものとしてでなく、固定不変のものとして、生きているものとしてでなく、死んだものとしてとらえる習慣をのこした。そして、ベーコンとロックによって、おこなわれたように、この見方が自然科学から哲学にうつされたことによって、それは最近数世紀に特有な偏狭さ、すなわち形而上学的な考え方をつくりだした。

(ニ) 形而上学者にとっては、事物とその思想上の模写である概念は、個々ばらばらな、1つずつ順次に他のものと関係なしに考察されるべき、固定した、硬直した、いちどあたえられたらそれっきり変わらない研究対象である。形而上学者は、まったく媒介のない対立のなかで考え、彼の言葉はしかり、しかり、いな、いなであり、それ以上に出ることは、悪から来るのである。形而上学者にとっては、1つの物は存在するか、存在しないかである。1つの物がそれ自身であると同時に他のものであることはできない。肯定と否定とは絶対的に排除しあうし、同様に原因と結果は硬直した相互対立をなしている。この考え方は、いわゆる常識の考え方であるので、一見したところきわめて明白なように見える。

(ホ) しかしながら、常識というものは、わが家のうちの日常茶飯事にかんしてはけっこう尊敬すべき仲間であるけれども、研究という広い世間にのりだすやいなや、まったく驚くべき冒険に出くわすのである。そして形而上学的な見方は、対象の性質に応じて広い狭いはあるが、かなり広い領域で正当でもあるし、必要でさえあるとはいえ、しかもなおつねに遅かれ早かれいつでも限界につきあたり、この限界からさきではそれは一面的な、偏狭な、抽象的なものになり、解決できない矛盾のなかに迷いこんでしまう。というのは、形而上学的な見方は、個々の物にとらわれてその関連を忘れ、その存在にとらわれてその生成と消滅を忘れ、静止にとらわれて運動を忘れるからであり、木を見て森を見ないからである。日常の場合には、われわれはたとえば、動物が生きているか死んでいるかを知っているし、そのどちらであるか確固として言うことができる。しかし、もっと厳密に研究してみると、これはしばしばこのうえなく複雑な問題である。胎児の致死が殺人になる合理的な限界を発見しようとしてむだ骨を折ったことのある法律家なら、このことを非常によく知っている。同様にまた、死の瞬間を確定することも不可能である。というのは、生理学の立証するところでは、死は一度きりの瞬間的なできごとではなくて、非常にながびく過程だからである。同様にどの生物も、各瞬間に、同一のものであって同一のものでない。各瞬間に生物は、外部からとり入れた物質を消化し、他の物質を排泄する。各瞬間に、その身体の細胞は死滅し、新しい細胞が形成される。いずれにせよ多かれ少なかれ時間が

たつと、この身体の物質は完全に更新されて、他の物質原子によっておきかえられているので、どの生物もつねに同一のものであり、しかもなお他のものであるということになる。われわれはまた、厳密に考察することによって、肯定と否定というような対立の両極は、対立していると同時にたがいに切りはなせないものであり、それらはまったく対立しているにもかかわらず相互に浸透しあっていることがわかる。同様に、原因と結果とは、個々の場合に適用したときだけそのままではまる観念であって、われわれが個々の場合を世界全体との全般的な連関のなかで考察するやいなや、両者は重なり合い、普遍的な交互作用という見解に解消し、原因と結果とはたえずその位置をかえ、いまあるいはここで結果であったものが、あちらまたはあとでは原因となり、またその逆のこともおこることがわかる。

(へ) これらすべての過程と思考方法は、形而上学的思考のわくにははまらない。これに反して、事物とその概念による模写を本質的に、それらの連関、連鎖、運動、発生と消滅においてとらえる弁証法にとっては、前にあげたような諸過程は、すべて弁証法自身のやり方を確証するものである。自然は弁証法の試金石であり、近代の自然科学はこの検証のためにきわめて豊富な、日ごとに積み重ねられていく材料を提供し、そのことによって、自然においては、結局、すべてが形而上学的にではなくて弁証法的小おこなわれていること、自然は永遠に一樣なたえずくりかえされる循環運動をしているのではなくて、本当の歴史を経過していることを証明した、とわれわれは言わなければならない。ここではだれよりもダーウィンの名をあげなければならない。彼は、今日の生物界全体が、植物も動物も、したがってまた人間も、幾百万年にわたってひきつづいた発展過程の産物であることを証明することによって、形而上学的自然観にもっとも強力な打撃をあたえた。しかし、弁証法的に考えることに通じている自然科学者はいままでのところ数えるほどしかいないので、いま理論的自然科学を支配し、教師をも学生をも、著者をも読者をも絶望におとし置いているはてしない混乱は、発見された結果と従来からの考え方とのこの衝突から説明がつくのである。

(ト) したがって、世界全体、その発展と人類の発展、ならびにこの発展の人間の頭のなかでの映像を正確に叙述することは、ただ弁証法的な道によって、生成と消滅、前進的または後退的变化の全般的な交互作用にたえず注目することによってのみ、達成できるのである。そして、この精神で近代のドイツ哲学もただちに立ちあらわれた。カントは、ニュートンの安定した太陽系とその——ひとたびあの有名な最初の衝撃があたえられたのちの——永遠の持続とを一つの歴史的過程に、すなわち一つの回転する星雲からの太陽とすべての惑星の発生に、解消することによって、彼の人生の行路をはじめた。そのさい彼はすでに、太陽系のこの発生とともに、その将来の滅亡もまた必然的にあたえられているという結論をひきだしていた。彼の見解は半世紀後にラプラスによって基礎づけられ、さらに半世紀後にはこのような灼熱したガス塊が、さまざまな凝縮度で宇宙空間に存在していることが、分光器によって証明された。

この近代のドイツ哲学はヘーゲルの体系において完結に達したが、このヘーゲルの体系

においてはじめて——そしてこのことがこの体系の大きな功績であるが——自然的、歴史的、および精神的世界全体が一つの過程として、すなわち、不断に運動し、変化し、改造され、発展しているものとしてとらえられ、叙述され、そして、この運動と発展のうちにある内的な連関を指摘する試みがなされた。この観点からすれば、人類の歴史は、無意味な暴力行為の雑然としたもつれあいとしてでなくて、人類そのものの発展過程としてあらわれる。この無意味な暴力行為というのは、いまや成熟に達している哲学者の理性の審判の前ではすべて一様に排斥されるべきものであり、できるだけ早く忘れるのがいちばんよいのである。また、人類自身の発展過程については、この過程がいろいろなわき道をとおりながらだんだんと段階をおって進んでいったあとをたどり、あらゆる外見上の偶然性をつらぬくこの過程の内的合法則性を指摘することが、いまや思考の課題になったのである。」（エンゲルス『空想から科学へ』48～55ページ）

【資料8】マルクスの弁証法的方法

「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれとは根本的に異なっているばかりでなく、それとは正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに1つの自立的な主体に転化しさえした、思考過程が、現実的なものの創造者であって、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない。私にあっては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで置き換えられ、翻訳された物質的なものにほかならない。

……弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸法則をはじめて包括的で意識的な仕方でも叙述したということ、決してさまたげるものではない。弁証法はヘーゲルにあってはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならない。

その神秘化された形態で、弁証法はドイツの流行となった。というのは、それが現存するものを神々しいものに見えたからである。その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者にとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜなら、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである。」（マルクス「第2版へのあと書き」、『資本論』新日本出版社、新書版①28～29ページ）

三、史的唯物論

【資料9】「歴史をつくる」ためにはまず生きることができなければならない

「われわれは、無前提なドイツ人のところでは、すべての人間的存在の、したがってまたすべての歴史の第1の前提、すなわち、人間たちは『歴史をつくる』ことができるためには生きることができなければならないという前提を確認することからはじめなければな

らない。しかし、生きるために必要なのは、とりわけ、飲食、住居、衣服、そしてさらにその他のいくつかのものである。したがって、第1の歴史的行為は、これらの欲求を充足するための諸手段の産出、物質的生活そのものの生産であり、しかも、これは、人間を生かしておくだけのためにも、数千年前と同様に今日もお日々刻々はたされなければならない歴史的行為、すべての歴史の根本条件である。」（『ドイツ・イデオロギー』35ページ）

「人間史の第1の前提は、もちろん生きた人間的諸個人の存在である。したがって、確認されるべき第1の事実は、これらの個人の身体的組織およびそれによってあたえられるその他の自然にたいする彼らの関係である。……すべての歴史記述は、これらの自然的基礎、および歴史の経過における人間の行動によるそれらの変形から出発しなければならない。

……人間自身は、彼らが生産手段を生産——彼らの身体的組織によって条件づけられている措置——しはじめるやいなや、みずから動物から区別しはじめる。人間は彼らの生活手段を生産することによって、間接的に彼らの物質的生活そのものを生産する。人間が彼らの生活手段を生産する様式は、さしあたりは、眼前に見いだされる、また再生産されるべき生活手段そのものの特性に依存する。この生産の様式は、これが諸個人の肉体的存在の再生産であるという側面からだけ考察されるべきではない。それはむしろ、すでにこれらの個人の活動のある特定の方法、彼らの生命を表出するある特定の方法、彼らのある特定の生活様式なのである。諸個人が彼らの生命を表出するとおりに、彼らは存在しているのである。したがって、彼らがなんであるかは、彼らの生産と、すなわち、彼らがなにを生産するか、また、彼らがいかに生産するかと一致する。したがって諸個人がなんであるかは、彼らの生産の物質的諸条件に依存する。」（同前、17～18ページ）

【資料10】史的唯物論の「定式」（マルクス『経済学批判』序言）

「私の研究にとって導きの糸として役立つ一般的な結論は、簡単に次のように定式化することができる。

（イ）人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係にはいり込む。すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいり込む。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが現実の土台であり、その上に1つの法的かつ政治的な上部構造がそびえ立ち、その土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程全般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する。

（ロ）社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それまでそれらがその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展の諸形態からその桎梏（しっこく）に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が、徐々にせよ急速にせよ、くつがえる。このような諸変革を考察

するにあたっては、経済的な生産諸条件に起きた自然科学的に正確に確認できる物質的な変革と、人間がこの衝突を意識するようになりこれとたたかって決着をつける場となる、法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかを判断する場合に、その個人が自分をうぬぼれ描く評価には頼れないのと同様に、このような変革の時期を、その時期の意識をもとに判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、すなわち社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに存在する衝突から、説明しなければならない。

(ハ) 1つの社会構成体は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しきらないうちは、けっして没落することはなく、また、新しいさらに高度の生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会自体の胎内で孵化しきらないうちは、けっして古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、みずからが解決できる課題だけをみずから提起する。というのは、やや立ち入って考察してみるとつねにわかることだが、課題そのものが生まれるのは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくともそれらが生じつつあることが把握される場合だけだからである。

(ニ) 大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的の生産様式が、経済的社会構成体の進歩していく諸時期として特徴づけられよう。ブルジョア的の生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をもつくりだす。それゆえ。この社会構成体をもって人間社会の前史は、終わりを告げる。(マルクス「『経済学批判』序言」1859年、新日本出版社、古典選書シリーズ、14～16ページ。(イ)～(ニ)の区切りと改行は引用者による)

【資料11】階級とは

「新しい諸事実は、これまでの歴史全体を新しく研究するようにせまったが、その結果つぎのことがあきらかになった。これまでのすべての歴史は、原始状態を例外として、階級闘争の歴史であったこと、これらのたがいに闘争する社会の諸階級は、いつでもその時代の生産関係と交易関係、一口でいえば、経済的諸関係の産物であること、だから社会のそのときどきの経済的構造が現実の土台をかたちづくっており、それぞれの歴史的時代の法律のおよび政治的諸制度ならびに宗教的、哲学的、その他の見解からなる全体の上部構造は、結局、この土台から説明されるべきであるということである。ヘーゲルは歴史観を形而上学から解放し、それを弁証法的にした——しかし彼の歴史観は本質的に観念論的であった。いまや観念論はその最後の隠れ場所から、歴史観から追い出され、唯物論的歴史観があたえられ、これまでのように人間の存在をその意識から説明するのではなく、人間の意識をその存在から説明する道が見いだされたのである。」(エンゲルス『空想から科学

【表 3】 人類社会のこれまでの4つの発展段階

原始共産制	人類社会の最初の段階。人びとは共同体（氏族）のなかに一体となって生活。生産手段は共同体全体のもの（共有）。生産力が低いため、みんなで働き、生産物もみんなで分ける。	無階級社会
奴隷制	働き手（奴隷）も生産手段も奴隷主が所有。奴隷は「ものと言う道具」として奴隷主に人格的にも従属。	階級社会
封建制	最大の働き手である農民は、農具などは自分で所有。しかし、主要な生産手段である土地は、封建領主のもの。農民は、身分制度によって土地に縛り付けられ、封建領主の農園で働かされる（労働地代）か、年貢をとられる（現物地代）かした。	
資本主義	主要な生産手段である工場や機械は、資本家が所有。生産手段をもたない労働者は、自分の労働力を資本家に売って、賃金を得て生活せざるをえない。資本家は、労働者を賃金で雇って工場で働かせ、剰余価値を手に入れる。	

【資料 1 2】 搾取の形態が社会の発展段階を区別する

「この剰余労働が、直接的生産者すなわち労働者からしぼり取られる形態だけが、もろもろの経済的社会構成体を区別するのであり、たとえば奴隷制の社会を賃労働の社会から区別するのである。」（マルクス『資本論』新書版②368ページ、上製版I a 369ページ）

「生産の社会的形態がどうであろうと、労働者と生産手段とはつねに生産の要因である。しかし、一方も他方も、互いに分離された状態では、ただ可能性から見て生産の要因であるにすぎない。およそ生産が行なわれるためには、それらが結合されなければならない。この結合がなしとげられる特殊な仕方によって、社会構造のさまざまな経済的諸時代が区別される。」（『資本論』新書版⑤62ページ、上製版II 64ページ）

四、資本主義経済のしくみ

【資料 1 3】 人間と自然の物質代謝

「労働は、まず第1に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素材そのものに一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために、自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠って

いる潜勢諸力を発展させ、その諸力の働きを自分自身の統御に服させる。」（『資本論』新書版②304ページ、上製版I a 304ページ）

【資料14】資本主義の推進的動機・規定的目的

「第1に、資本主義的生産過程を推進する動機とそれを規定する目的とは、できるだけ大きな資本の自己増殖、すなわち剰余価値のできるだけ大きな生産、したがって資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。」（『資本論』新書版③576ページ、上製版I b 574ページ）

「資本家としては、彼はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できる限り大きな量の剰余労働を吸収しようとする本能を、もっている。資本とは、生きた労働を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」（『資本論』新書版②395ページ、上製版I a 396ページ）

【資料15】「生産のための生産」にかり立てる

「資本家は、人格化された資本である限りにおいてのみ、1つの歴史的価値をもち、また、……歴史的存在権をもつ。その限りでのみ、彼自身の過渡的な必然性が、資本主義的生産様式の過渡的な必然性のうちに含まれる。しかし、その限りではまた、使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、それゆえ社会的生産諸力を発展させ、そしてまた各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる。……資本主義的生産の発展は、1つの産業的企業に投下される資本が絶えず増大することを必然化し、そして競争は個々の資本家にたいして、資本主義的生産様式の内在的諸法則を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家を強制して、彼の資本を維持するためには絶えず資本を拡大させるのであるが、彼は累進的蓄積によってのみそれを拡大することができる。」（『資本論』新書版④1015～1016ページ、上製版I b 1012ページ）

五、マルクスの未来社会論

【資料16】「否定の否定」による個人的所有の再建

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定〔資本主義的私的所有の否定〕は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果——すなわち、協業と、土地の共有ならびにその労働そのもの

によって生産された生産手段の共有——を基礎とする個人的所有を再建する」（『資本論』新書版④一三〇六ページ、上製版1 b一三〇一ページ）

	生産手段	生産物（生活手段）
小経営	生産者個人による私的所有（「自分の労働にもとづく個人的な私的所有」）	生産者による個人的所有
〔「生産者による私的所有」の否定〕		
資本主義	非生産者（＝資本家）による私的所有（「他人の労働の搾取にもとづく資本主義的な私的所有」）	「生産者（＝労働者）による個人的所有」の否定
〔「資本家による私的所有」の否定〕		
未来社会	「結合した生産者」による社会的所有	「生産者による個人的所有」の再建

※不破哲三『「資本論」前三部を読む』第三冊、二五七～二五八ページ参照

【資料17】未来社会における生産手段と生活手段

「最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体〔アソツィアツィオン〕を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、それゆえまた、直接的に彼にとっての使用価値でもあった。この連合体の総生産物は1つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう1つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的発展程度とに応じて、変化するであろう。」（『資本論』新書版①133ページ、上製版I a 133ページ）

【資料18】『共産党宣言』での社会変革の目標の定式化

「共産主義の特徴は、所有一般の廃止でなくて、ブルジョア的所有の廃止である。

しかし、近代的なブルジョア的私的所有は、階級対立に、他人による人の搾取にもとづいた、生産物の生産及び取得の、最後の、かつもっとも完成した表現である。

この意味で、共産主義者は、自分の理論を一つの表現で総括することができる——私的所有の廃止。」（マルクス、エンゲルス『共産党宣言』1848年、古典選書シリーズ『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社、73ページ）

【資料19】『資本論』のなかでの未来社会の特徴づけ

(1) 「共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に1つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」(第1部第1篇「第1章商品」①133ページ、上製版I a 133ページ)

(2) 「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、……自由に社会化された人間の産物として彼らの意識的計画的な管理のもとにおかれる」(同前、①135ページ、I a 135ページ)

(3) 「社会的生産過程の……意識的な社会的な管理および規制」(第1部第4篇「第12章分業とマニファクチュア」③618ページ、I b 616ページ)

(4) 「共産主義社会」(第1部第4篇「第13章 機械と大工業」③681ページ、I b 679ページ)

(5) 「各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態」(第1部第7篇「第22章 剰余価値の資本への転化」④1016ページ、I b 1012ページ)

(6) 「現存の生産手段および労働力によって直接的かつ計画的に実現されうるいっそう合理的な結合」(同前、④1047ページ、I b 1043ページ)

(7) 「この否定〔資本主義的私的所有の否定〕は、……資本主義時代の成果、すなわち、協業と、土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有を基礎とする個人的所有を再建する」(第1部第7篇「第24章 いわゆる本源的蓄積」④1306ページ、I b 1301ページ)

(8) 「共同的生産」(第2部第1篇「第6章 流通費」⑤211ページ、II 214ページ)

(9) 「共産主義社会」(第2部第2篇「第16章 可変資本の回転」⑥497ページ、II 502ページ)

(10) 「社会的〔社会化された〕生産」(第2部第3篇「第18章 緒論」⑦566ページ、II 571ページ)

(11) 「労働者たちが自分自身の勘定で労働する社会状態」(第3部第1篇「第5章 不変資本の使用における節約」⑧142ページ、III a 143ページ)

(12) 「人間社会の意識的な再構成」(同前、⑧150ページ、III a 151ページ)

(13) 「生産が社会のまえもつての現実の管理のもとにある」社会(第3部第2篇「第10章 競争による一般的利潤率の均等化。……」⑨321ページ、III a 317ページ)

(14) 「生産者たちが自分たちの生産をまえもつて作成した計画に従つて規制する社会」(第3部第3篇「第一五章 この法則の内的諸矛盾の展開」⑨445ページ、III a 442～443ページ)

(15) 「資本〔生産手段のこと——引用者〕が生産者たちの所有に、ただし、もはや個々ばらばらな生産者たちの私的所有としての所有ではなく、結合した生産者である彼らの所有としての、直接的な社会的所有としての所有に」転化する。これとともに、「これまではまだ資本所有と結びついていた再生産過程上のすべての機能が、結合した生産者たちの単

なる諸機能に、社会的諸機能に、転化する」（第3部第5篇「第27章 資本主義的生産における信用の役割」⑩758ページ、Ⅲa758ページ）

（16）「結合的生産様式」（同前、⑩764ページ、Ⅲa764ページ）

（17）「結合した労働の生産様式」（第3部第5篇「第36章 資本主義以前〔の状態〕」⑪1064ページ、Ⅲb1069ページ）

（18）「社会の資本主義的形態が止揚されて、社会が意識的かつ計画的な結合体〔アソツィアツィオン〕として組織される」（第3部第6篇「第39章 差額地代Ⅰ」⑫1161ページ、Ⅲb1167ページ）

（19）「より高度の経済的社会構成体」（第3部第6篇「第46章 建築地地代。……」⑬1352ページ、Ⅲb1357ページ）

（20）「社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝を「合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおく」社会（第3部第7篇「第48章 三位一体的定式」⑭1435ページ、Ⅲb1441ページ）

（不破哲三『古典研究 マルクス未来社会論』新日本出版社、169～171ページ）

【資料20】『共産党宣言』から

「階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会的代りに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件である連合体〔アソツィアツィオン〕が現われる。」（古典選書シリーズ『共産党宣言／共産主義の諸原理』86ページ）

【資料21】「自由の国」と「必然性の国」

「（イ）自由の国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。

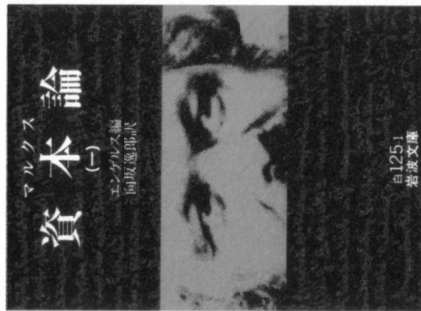
（ロ）未開人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない。しかも、すべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産諸様式のもとで、彼〔人〕は、そうした格闘をしなければならない。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。

（ハ）この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。

（ニ）この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上のみ

開花しうるのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である。」（『資本論』新書版⑬
1434～1435ページ、上製版Ⅲb 1440～1441ページ。（イ）～（二）の区分
は引用者による）

『資本論(一)』カール・マルクス著／フリードリヒ・エンゲルス編／向坂逸郎訳
岩波文庫 795円 全9巻すべて読みきるには、かなりの根気が必要です



本 ポクらは資本主義で生きています!

800字でわかるか!?

秋の夜長に『資本論』を学ぶ

こんな経済書、そういえば世界史の時間に出てきましたよね

【国家論】

アダム・スミス著。「見えざる手」による予定調的・自由放任政策を主とした経済学の古典

【人口論】

T・R・マルサース著。家数計画による人口抑制を貧困解消の鍵とする新マルサース主義は現代にも生き残っている

【プロテスタントスピリットの倫理と資本主義の精神】

マックス・ウェーバー著。禁欲的プロテスタントスピリットの倫理が、近代資本主義の精神的支柱となったと論じた

【雇用・利子および貨幣の一般理論】

J・M・ケインズ著。不況と失業の原因を究明し、それを克服する理論を提示した

【経済学原理】

J・S・ミル著。私有財産制度と競争に立脚する経済を前提にしてきた旧来の経済学の修正を試みた

難しいようなタイトルがずらり。思い切っって読んでみると、そうでもないかも…?

BOOK

TBSラジオ「～夜な夜なニューエイジー～パワソフ」
毎週月～金曜日24時～25時オンエア中 出演：宮川賢(月～木)・古田新太(金)

今

年の民間企業の冬のボーナスが8年ぶりに増えるらしい。ふん。だからといってボクの生活がいきなり潤うわけじゃない。資本主義の世の中、そうカンタンに上手くはいかない。こんな現実を予言していた(?)一冊の本がある。マルクスが書いた『資本論』だ。ん? マルクス? 資本論? そう、中学や高校で1回は聞く名前だ。経済学者カール・マルクスが資本論を書いたのは19世紀。当時のイギリスでは、機械化が進む紡績業が最先端だった。新しい資本家が続々登場する一方、過酷な労働に苦しめられる労働者たち。マルクスはその現状を描くと同時に、100年以上も前に、現代にも通じる資本主義の最も根源的な問題を提起しているのだ。

彼が『資本論』の中で言っているのは、『賃金労働者(サラリーマン)は必ずしもその働きに応じた給料をもらえるわけではない。賃金労働者が頑張った時、得するのは企業や資本家である』『頑張ったらか

といって、資本主義経済の中では、恐慌や不況から逃れる事は出来ない』『不況になると仕事にあぶれ、日用品すら買えなくなってしまう人たちが生まれる。買えない人が増えれば、売れない商品が増える。売れない商品はどんどん捨てられてしまう』『資本主義は永遠じゃない』『人よりも企業のためにある資本主義はそんな矛盾に満ちた社会である』…ざっとこんなカンジだ。

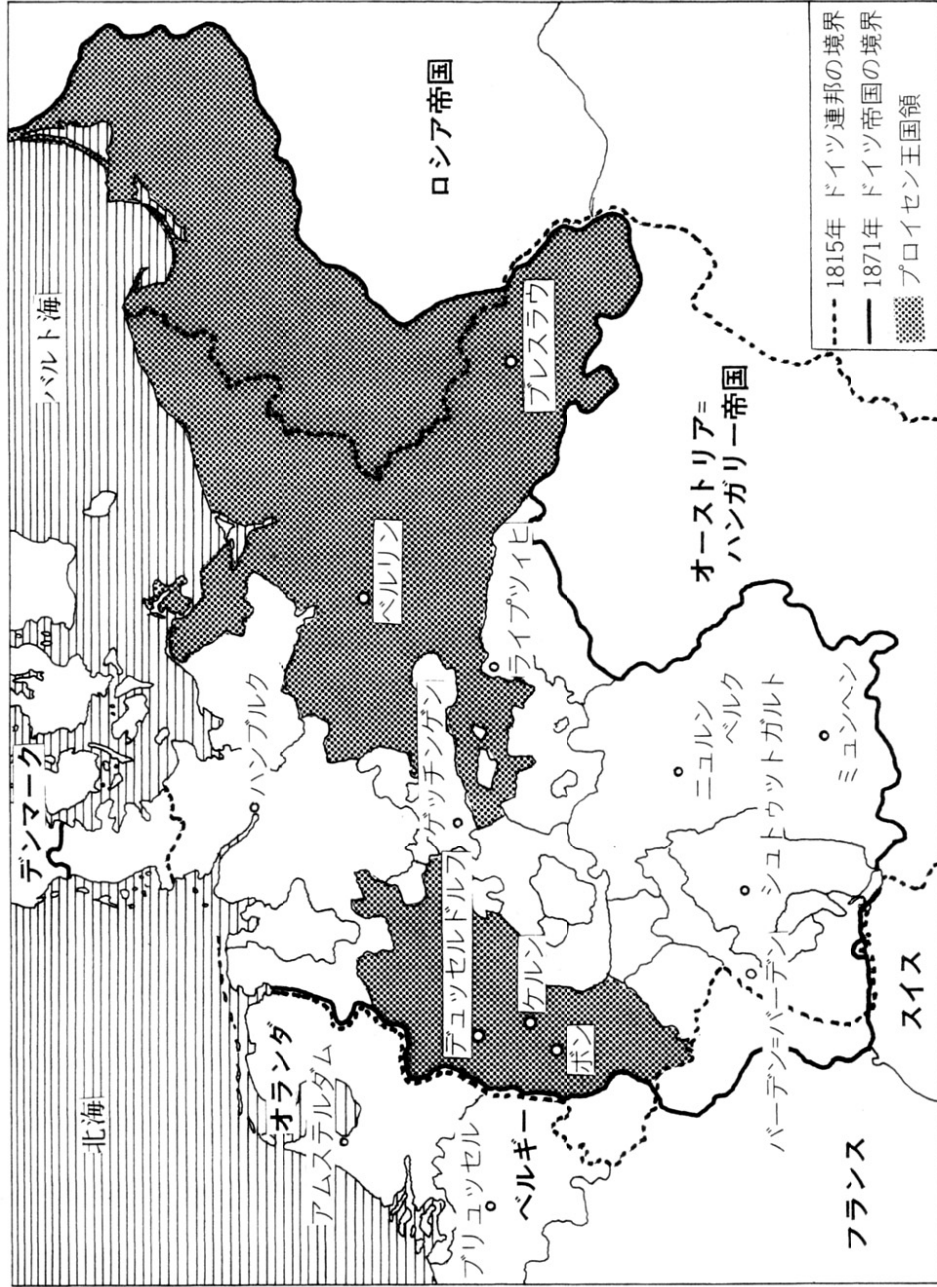
僕たちの現実には置き換えてみる。頑張った給料を稼ぐ。同期より早く出世した。虎の子で車とマンションを買う。でも会社の方がもっと儲かっている。それどころか、少しでも景気が悪くなればレストランの危機。新しいIT資本家が続々誕生して、サービス残業に勤しむ僕たちがいる。マルクスが書いた『資本論』と確かにそっくりだ。資本論の主人公はボクたちだったの?

そう思っって読むと案外スラスラと読めたりするから不思議なもの。秋の夜長、古い経済書を読むと、世界経済の未来が見えてくるかも!? (TBSラジオ「パワソフ」)

マルクス、エンゲルス関連年表

18世紀			<p>1770 ヘーゲル生まれる 1776 アメリカ「独立宣言」 1872 ワット、複動式蒸気機関の特許 1789 フランス革命。「人権宣言」</p>
19世紀	<p>1818 マルクス生まれる 1820 エンゲルス生まれる 1844 マルクスとエンゲルス、理論上の一致を確認 1848 『共産党宣言』 1859 マルクス『経済学批判』第1分冊 1867 マルクス『資本論』第1部初版 1872 『資本論』第2版 同フランス語版刊行（～75） 1875 マルクス「ゴータ綱領批判」 1877 エンゲルス『反デューリング論』 1880 エンゲルス『空想から科学へ』 1883 マルクス死す 1885 エンゲルス編集で『資本論』第2部刊行 1894 エンゲルス編集で『資本論』第3部刊行 1895 エンゲルス死す</p>	<p>1847 共産主義者同盟第1回大会 1864 国際労働者協会（第1インタナショナル）創立 1875 ドイツ社会主義労働党結成 1889 第2インタナショナル創立</p>	<p>1810年代 英でラダイト運動（機械打壊し） 1831 仏・リヨンで最初の労働者蜂起 1838～42 英・チャーティスト運動 1848～49 ヨーロッパ革命 1868 日本・明治維新 1871 パリ・コミューン。最初の労働者革命</p>

19世紀のドイツ



※ 鮎坂真『科学的社會主義の世界観』（新日本出版社、2002年）23ページから

年表 科学的社会主義の3つの源泉とマルクス、エンゲルス

17世紀	<p>古典派経済学</p> <p>ペティ(1623～1687)</p> <p>ケネー(1694～1774)</p>		1640 イギリス市民革命	
18世紀	<p>スミス(1723～1790)</p> <p>リカードウ(1772～1823)</p> <p>1776 スミス『国富論』</p>	<p>空想的社会主義</p> <p>サン-シモン(1760～1825)</p> <p>オウエン(1771～1858)</p> <p>フーリエ(1772～1837)</p>	<p>ドイツ古典哲学</p> <p>カント(1724～1804)</p> <p>ヘーゲル(1770～1814)</p>	<p>1776 アメリカ独立</p> <p>1782 ワット、複動式蒸気機関の特許</p> <p>1789 フランス革命</p>
19世紀	<p>1817 リカードウ『経済学および課税の原理』</p>	<p>1802 サン-シモン『ジュネーブの一住民の手紙』</p> <p>1808 フーリエ『四運動の理論』</p> <p>1817 オウエン、共産主義村の「計画」を公表</p> <p>マルクス(1818～1883)</p> <p>エンゲルス(1820～1895)</p>	<p>フョイエルバッハ(1804～1872)</p> <p>1821 ヘーゲル『法の哲学』</p> <p>1841 フョイエルバッハ『キリスト教の本質』</p>	<p>1831 仏・リヨンで最初の労働者蜂起</p> <p>1838～42 英・チャータースト運動</p> <p>1848～49 ヨローパ革命</p> <p>1871 パリ・コミューン</p>

図1 人間と自然の物質代謝

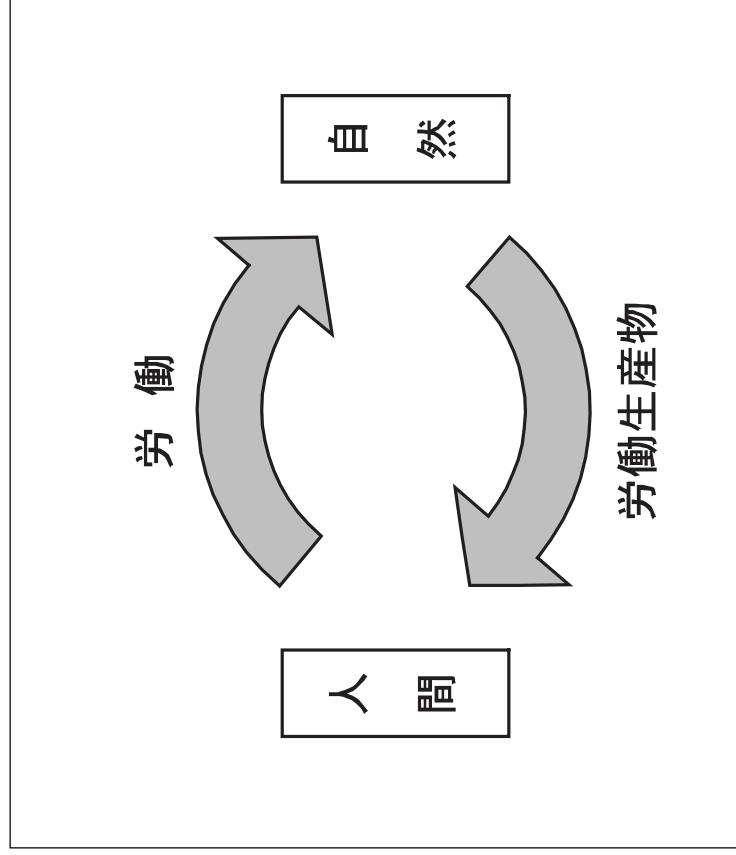


図2 労働の3要素

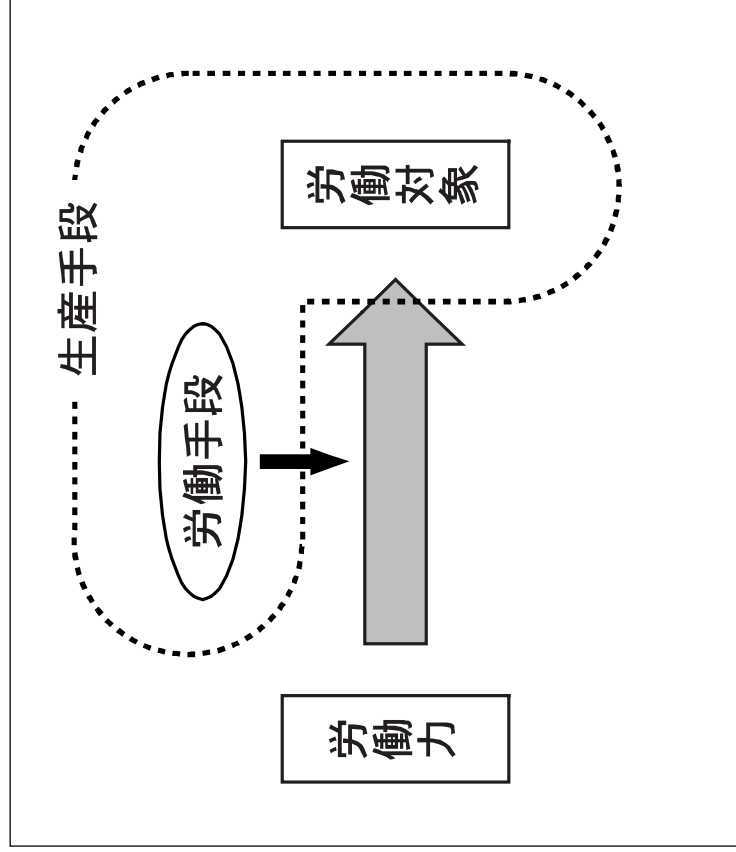


図3 商品の価値

機械が10年もつとしたら、1年では機械全体の価値の10分の1が生産物の価値に入り込む

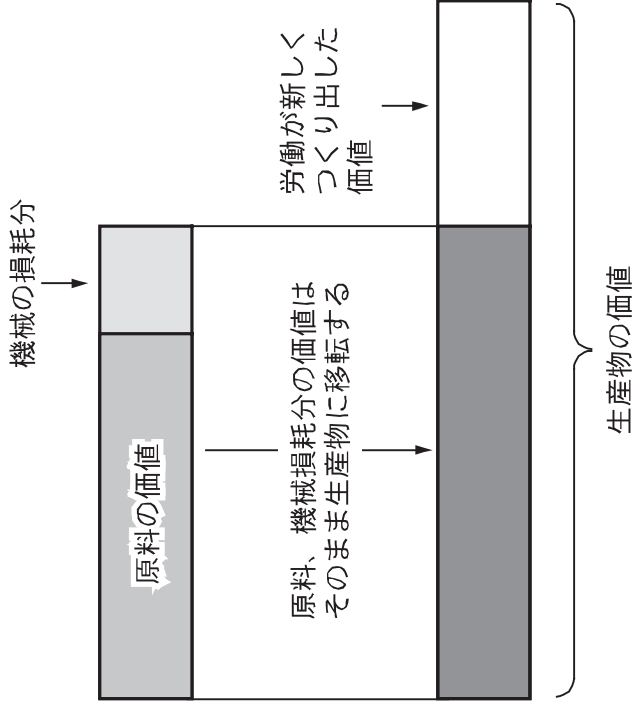
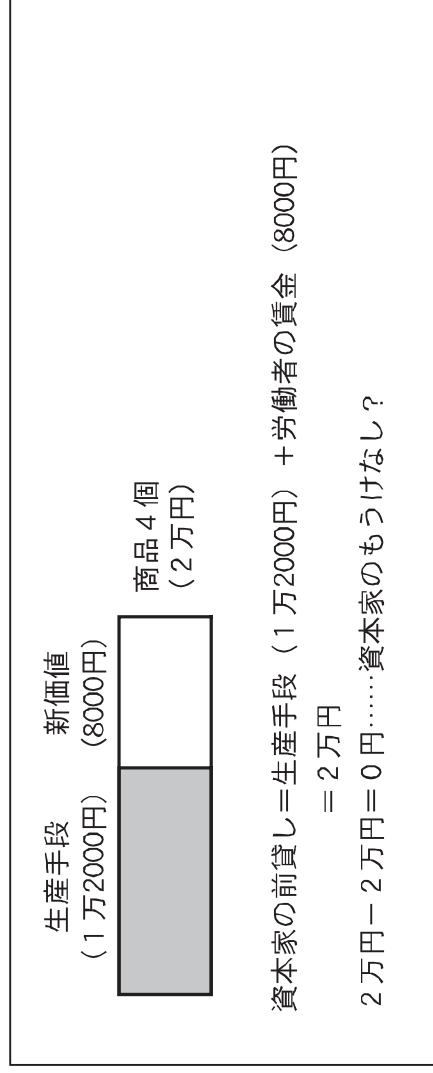


図4 搾取の仕組み

仮に、労働時間1時間当たりの価値=2000円
労働者が1日生活するのに必要な生活手段の価値=4労働時間(8000円)
とした場合

【4時間労働だと…】



【8時間労働にすると…】

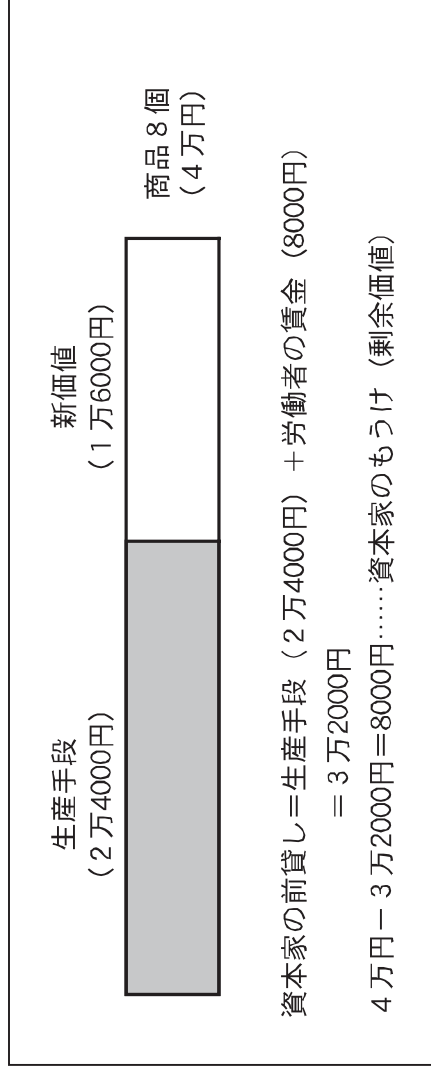


図5 不変資本、可変資本、剰余価値

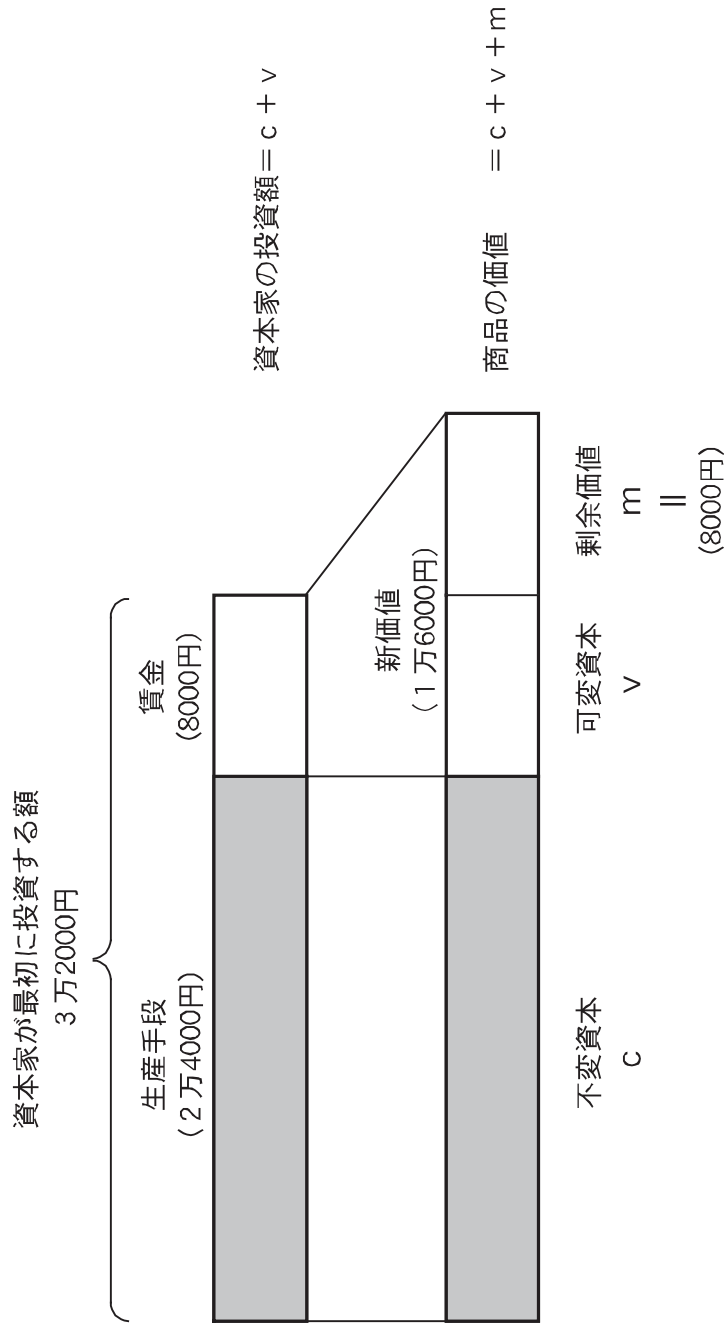


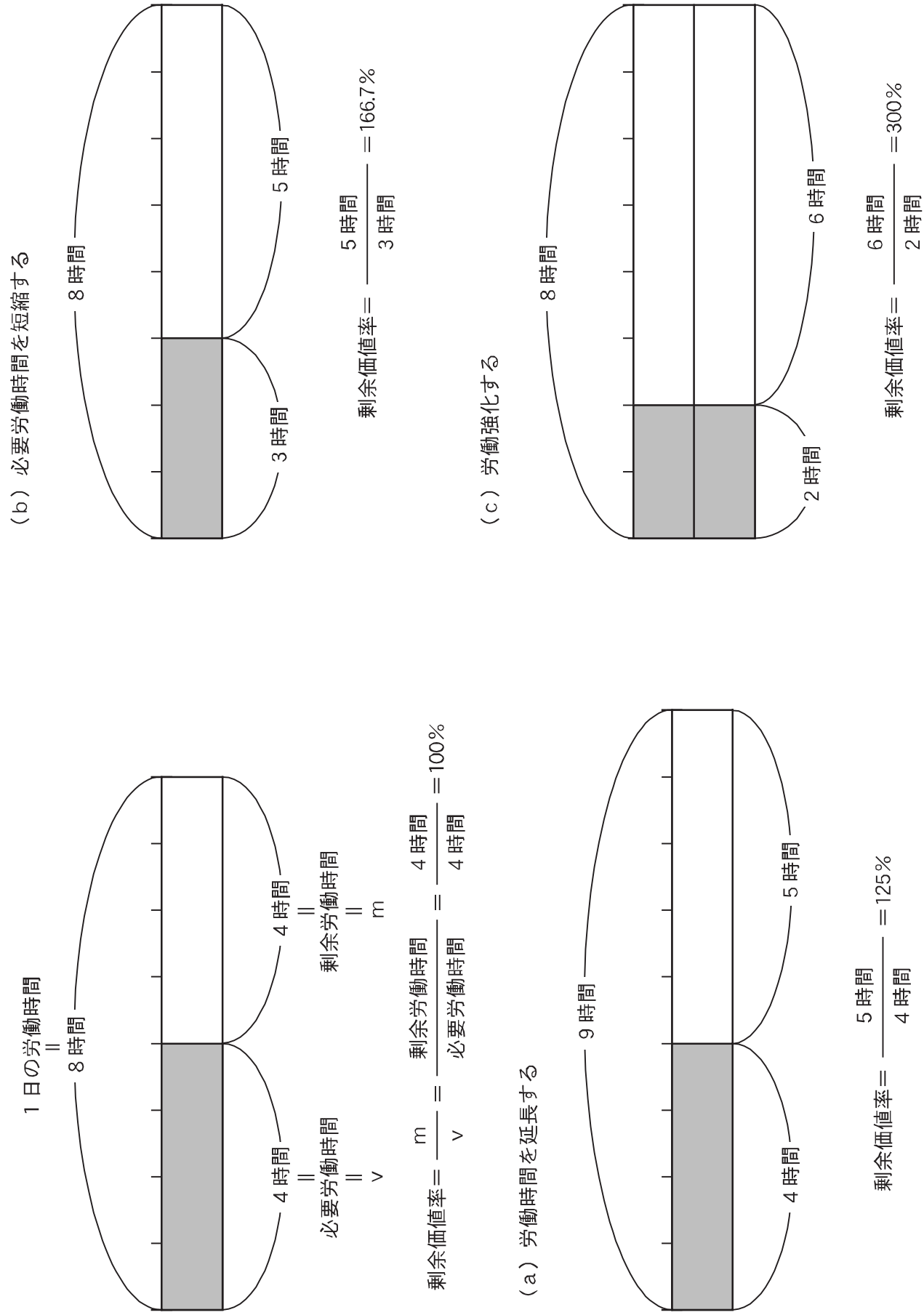
図6 剰余価値率と利潤率

$$\text{剰余価値率} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{m}{v} \times 100\%$$

(搾取率)

$$\text{利潤率} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{不変資本} + \text{可変資本}} = \frac{m}{c + v} \times 100\%$$

図7 搾取を強める方法



日本共産党と科学的社会主義

1957年 第7回党大会

「五〇年問題」を自主的に総括し、自主独立の立場を確立。同時に、武装闘争論の誤りも明らかに。（『日本共産党の八十年』127～128ページ）

1961年 第8回党大会

綱領路線を確立。①日本の政治や社会のどんな変革も「国会で安定した過半数」をえて実現することをめざすとし、武装闘争方針や強力革命論を明確に退けることを綱領上明らかに。②資本主義の枠内での民主的変革の方針。③社会の段階的発展の見地をつらぬいたこと。④政府の問題でも、民主的な変革を全面的にやりとげる政府にいたる過程でも、さまざまな形の政府をつくることがありうるとの立場を明らかにするとともに、社会発展のすべての過程で統一戦線と連合政権に依拠することを一貫した方針とした。（『八十年』159～160ページ）

1960年代

アメリカの世界戦略を具体的に分析し、「各個撃破政策」と特徴づける。
ソ連共産党、中国共産党毛沢東派の干渉とのたたかい。

1967年 論文「極左日和見主義者の中傷と挑発」

レーニン『国家と革命』の言説を絶対化して、議会活動の否定、中国式「人民戦争」論を押しつける議論を批判。マルクスらしいの科学的社会主義の理論と運動のなかに、民主的議会をかちとり、そのもとで「議会の多数を得ての革命」をすすめる方針が一貫して流れていることを明らかにした。（『八十年』193ページ）

1968年 ソ連などのチェコスロヴァキア侵略

民族自決権の擁護が科学的社会主義の原則であることを解明し、ソ連などの行為はそれをふみにじる決定的な誤りであることを批判。同時に、この事件をきっかけに、社会主義のもとでの民主主義のあり方について探求を本格的に開始。1969年3月、社会主義政権においても、反対政党をふくむ複数政党制をとることを明らかにした。（『八十年』197ページ）

1970年 第11回党大会

「進んだ資本主義国の革命」は「新しい、人類の偉大な摸索と実践の分野」であり「新しい複雑性とともに新しい可能性」があることを強調。複数政党制、選挙の結果による政権交代制をとることなど、いっそう明確に。（『八十年』197ページ）

1974年10月 未来社会において党と国家は明確に区別され、科学的社会主義を「国定の哲学」にすることはしないという見解を発表。

1975年12月 第7回中央委員会総会決議「宗教についての日本共産党の見解と態度」

1976年 第13回臨時党大会

「自由と民主主義の宣言」を採択。自由と民主主義の全面的で本格的な発展こそが、マルクス、エンゲルス以来の本来の科学的社会主義の立場であることを解明。そのなかで、社会主義の未来において、市場経済を活用する立場を明らかにする。同時に、

科学的社会主義の呼称問題について、「マルクス・レーニン主義」の呼称をやめ科学的社会主義とすることを決める。

1980年 第15回党大会

発達した資本主義が社会主義にひきつぐべき歴史的遺産として、マルクスが高度の物質的生産力とともに人間の「個性」の発展の諸条件をあげたことを解明。

1985年 第17回党大会

綱領を一部改正し、「覇権主義の克服」を綱領上の課題として明記するとともに、「資本主義の全般的危機」という誤った規定を削除。

1991年 ソ連共産党の解散にたいして、「大国主義・覇権主義の歴史的巨悪の党の終焉を歓迎する」との常幹声明を発表

同12月、常幹声明で、科学的社会主義の運動として自主的に発展するためには、①覇権主義とそれへの追従のあらゆる傾向を根本的に清算すること、②「共産主義・社会主義崩壊」論の誤りに反対すること、③科学的社会主義の学説を生きた指針として社会の法則的な発展を促進する立場をつらぬくこと、という「3つの基準」を提起。

1994年 第20回党大会

綱領を一部改定し、スターリン以後の旧ソ連社会が、社会主義社会でも、それへの過渡期の社会でもなかったというところに、党の認識の到達点があることを示した。
(『八十年』287ページ)

この間の日本共産党の理論的探究について

1996～1997年 『エンゲルスと「資本論」』の連載・刊行

1997～2001年 『レーニンと「資本論」』の連載・刊行

1999年

7月 党創立77周年記念講演「現代史のなかで日本共産党を考える」のなかで、「科学的社会主義をどういう立場でとらえ、発展させるか」、レーニンの理論の「全面的な再吟味」を提起

2000年

1月 不破委員長、新春インタビュー「世紀の転換点に立って——日本共産党の理論的な立場」（『世紀の転換点に立って』に収録）

11月 第22回党大会で党規約改定

2001年

1月 新春インタビュー「21世紀を展望して——国際交流のなかで、日本共産党の政策と理論を見る」、インタビュー「『1917年・「国家と革命」』をめぐって」（『世紀の転換点に立って』に収録）

不破議長が中央党学校で講義（『科学的社会主義を学ぶ』『日本共産党綱領を読む』として刊行）

- 11月 赤旗まつり講演「21世紀と『科学の目』」（同名单行本に収録）
- 2002年
- 1月 新春インタビュー「21世紀はどんな時代になるか」（『21世紀はどんな時代になるか』に収録）
- 1～12月 党本部で不破議長を講師に「代々木『資本論』ゼミナール」を開催（その後『「資本論」全三部を読む』として刊行）
- 1～10月 「マルクスと『資本論』——再生産論と恐慌」を連載（2003年に同名单行本として刊行）
- 2月 東京「青年のつどい」で講演「21世紀を、志をもって生きよう」（『21世紀はどんな時代になるか』に収録）
- 4月 広島と大阪で講演「21世紀に『資本論』を読む」（『2つの世紀と日本共産党』に収録）
- 5月 講演「激動の世紀の出発点に立って」（同前）
- 8月 中国を訪問、学術講演「レーニンと市場経済」（『北京の5日間』、『「資本論」全三部を読む』第一冊に収録）
- 11月 赤旗まつり講演「ふたたび『科学の目』を語る——21世紀の資本主義と社会主義」（同名单行本に収録）
- 2003年
- 6月 第7回中央委員会総会、綱領改定案を提案
- 8月 党本部の学習会で講義「『ゴータ綱領批判』の読み方」（『古典研究 マルクス未来社会論』に収録）
- 2004年
- 1月 第23回党大会、新しい綱領を決定
- 2月 全国都道府県学習・教育部長会議で講義。その一部を整理して「『資本論』のなかの未来社会論——綱領の諸規定の原理的な根拠を探る」として発表（『古典研究 マルクス未来社会論』に収録）
- 民青同盟全国大会で講演「新しい世紀と新しい綱領」（『報告集 日本共産党綱領』に収録）
- 3月 中央党学校で綱領講義（12月に『新・日本共産党綱領を読む』として刊行）
- 7月 『レーニンと「資本論』』からレーニンの革命論の問題点を検討した2つの章をとりだし、『古典研究 議会の多数を得ての革命』として刊行
- 10、11月 仙台、東京で『資本論』について講演（「21世紀・『資本論』のすすめ」として、『前衛』2005年2、3月号に掲載）
- 2005年
- 2月 党綱領幹部学習会で講義「党綱領の理論上の突破点について」（同名单行本として刊行）
- 4月 日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会主催の集会で講演「アジア・

アフリカ・ラテンアメリカ——いまこの世界をどう見るか」（同名单行本として刊行）

5月 京都大学の新生歓迎講演会で「これからの時代と世界のこと、学問のこと」と題して講演（民青同盟から同名のパンフレットで刊行、『日本の前途を考える』に収録）

12月 中国共産党代表団と4日間にわたって理論交流（『21世紀の世界と社会主義』として刊行）